

C. 一般的価値形態(p88)

1着の上着 = 20エレのリンネル
10ポンドの茶 = 20エレのリンネル
40ポンドのコーヒー = 20エレのリンネル
1ワオーターの小麦 = 20エレのリンネル
2オンスの金 = 20エレのリンネル
1/2トンの鉄 = 20エレのリンネル
×量の商品A = 20エレのリンネル
その他 = 20エレのリンネル

1. 価値形態の変化した性格(p88)

(1) いろいろな商品は、それぞれの価値をここでは(1)単純に表している、というのは、ただ一つの商品で表しているからであり、(2)統一的に表している、というのは、同じ商品で表しているからである。諸商品の価値形態は単純で共通であり、従って、一般的である。

(2) 形態1と2はどちらも、ただ、一商品の価値をその商品自身の使用価値またはその商品体とは違ったものとして表現することしかできなかった。

(3) 第一の形態のは、一着の上着 = 20エレのリンネル、10ポンドの茶 = 1/2トンの鉄などという価値等式を与えた。上着価値は、リンネルに等しいもの、茶価値は鉄に等しいものというように表現されるのであるが、しかし、リンネルに等しいものと鉄に等しいものとは、即ち、上着や茶のこれらの価値表現は、リンネルと鉄とが違っているように違っている。この形態が実際にはっきりと現れるのは、ただ、労働生産物が偶然的な時折の交換によって商品にされるような最初の時期だけのことである。

(4) 第二の形態は、第一の形態よりももっと完全に一商品の価値をその商品自身の使用価値から区別している。なぜなら、例えば上着の価値は、いまではあらゆる可能な形態で、即ち、リンネルに等しいもの、鉄に等しいもの、茶に等しいもの、等々として、つまりただ上着に等しいものだけを除いて他のあらゆる物に等しいものとして、上着の現物形態に相対しているからである。他方、ここでは諸商品の共通な価値表現は、すべて直接に排除されている。なぜなら、ここではそれぞれの商品の価値表現のなかでは、他の全ての商品はただ等価物の形態で現われるだけだからである。展開された価値形態がはじめて実際に現れるのは、ある労働生産物、例えば家畜がもはや例外的にではなく、既に慣習的にいろいろな他の商品と交換されるようになった時のことである。

(5) 三番目で最後の、新たに得られた形態は、商品世界の価値を、商品世界から分離された一つの同じ商品種類、たとえば、リンネルで表現し、こうして、すべての商品の価値を、その商品とリンネルとの同等性によって表す。リンネルと等しいものとして、どの商品の価値も、いまではその商品自身の使用価値から区別されるだけではなく、いっさいの使用価値からも区別され、まさにこのことによって、その商品とすべての商品とに共通なものとして表現されるのである。それだからこそ、この形態が初めて現実に諸商品を互いに価値として関係させるのであり、言い換えれば諸商品を互いに交換価値として現れさせるのである。

(6) 前の二つ形態は、商品の価値を、ただ一つの異種の商品によってであれ、その商品とは別の一連の

多数の商品によってあれ、一商品ごとに表現する。どちらの場合にも、自分に一つの価値形態を与えることは、いわば個別商品の私事であって、個別商品は他の諸商品の助力なしにこれを成し遂げるのである。他の諸商品は、その商品に対して、等価物という単に受動的な役割を演ずる。これに反して、一般的価値形態は、ただ商品世界の共同の仕事としてのみ成立する。一つの商品が一般的価値表現を得るのは、同時に、他のすべての商品が自分たちの価値を、同じ等価物で表現するからにはかならない。そして、新たに現れるどの商品種類もこれにならわなければならない。

かくして、諸商品の価値対象性は、それがこれらの物の純粹に「社会的な存在」であるからこそ、ただ諸商品の全面的な社会的関係によってのみ表現されうるのであり、従って、諸商品の価値形態は、社会的に認められた形態でなければならないということが、明瞭に現れてくるのである。

(7) リンネルに等しいものという形態ではいまや全ての商品が質的に同等なもの、即ち、価値一般として現れるだけではなく、同時に、量的に比較されうる価値量として現れる。すべての商品がそれぞれの価値量を同じ1つの材料、リンネルに映すので、これらの価値量は互いに反映しあう。例えば、10ポンドの茶 = 20エレのリンネル、そして、40ポンドのコーヒー = 20エレのリンネル。従って、10ポンドの茶 = 40ポンドのコーヒーというように。または、1ポンドのコーヒーに含まれる価値実体、労働は、1ポンドの茶に含まれているそれの1/4でしかない、というように。(p90)

(8) 商品世界の一般的な相対的価値形態は、商品世界から除外された等価物商品、リンネルに一般的な等価物という性格を押しつける。リンネル自身の現物形態がこの世界の共通な価値姿態なのであり、それだから、リンネルは他の全ての商品と直接に交換されうるのである。リンネルの物体形態は、いっさいの人間労働の目に見える化身、その一般的な社会的な蛹化として認められる。織布、即ち、リンネルを生産する私的労働が、同時に、一般的な社会的形態に、即ち、他のすべての労働との同等性の形態に、あるのである。一般的価値形態をなしている無数の等式は、リンネルに実現されている労働を、他の商品に含まれているそれぞれの労働に順々に等値し、こうすることによって織布を人間労働一般の一般的な現象形態にする。このようにして、商品価値に対象化されている労働は、現実の労働のすべての具体的形態と有用的属性とが捨象されている労働として、消極的に表されているだけではない。この労働自身の積極的な性質がはっきりと現れてくる。この労働は、いっさいの現実の労働がそれに共通な人間労働という性格に、人間の労働力の支出に、還元されたものである。

(9) 諸労働生産物を 無差別な人間労働の単なる凝固として表す一般的価値形態は、それ自身の構造によって、それが商品世界の社会的表現であることを示している。こうして、一般的価値形態は、この世界のなかでは労働の一般的な人間的性格が労働の独自な社会的性格となっているということを明らかに示しているのである。(p91)

2. 相対的価値形態と等価形態との発展関係 (p91)

(1) 相対的価値形態の発展の程度には、等価形態の発展の程度が対応する。しかし、これは注意すべきことであるが、等価形態の発展は、ただ相対的価値形態の発展の表現と結果でしかないのである。

(2) 一商品の単純な、または個別的な相対的価値形態は、他の一商品を個別的な等価物にする。相対的価値形態の展開された形態、即ち、全ての他の商品での一商品の価値の表現は、これらの商品にいろいろに違った種類の特殊な等価物という形態を刻印する。最後に、ある特別な商品種類が一般的な等価形態を与えられるのであるが、それは、他の全ての商品がこの商品種類を自分たちの統一的な一般的な価値形態の材料にするからである。

(3)しかし、価値形態一般が発展するのと同じ程度で、その2つの極の対立、相対的価値形態と等価形態との対立もまた発展する。

(4)既に第一の形態、20エレの「リンネル」 = 1着の上着 も、この対立を含んではいるが、それを固定させてはいない。同じ等式が前のほうから読まれるかあとほうから読まれるかにしたがって、「リンネル」と上着というような2つの商品極のそれぞれが、同じように、ある時は相対的価値形態にあり、あるときは等価形態にある。両極の対立をしっかりと把握するには、ここではまだ骨が折れるのである。

(5)形態IIでも、やはりただ一つ一つの商品種類がそれぞれの相対的価値を総対的に展開しうるだけである。言い換えれば、全ての他の商品がその商品種類に対して等価形態にあるからこそ、またその限りでのみ、その商品種類自身が、展開された相対的価値形態をもつのである。

ここではもはや価値等式一たとえば20エレの「リンネル」 = 1着の上着 または = 10ポンドの茶 または = 1ワオーターの小麦、等々の2つの辺を置き換えることは、この等式の全性格を変えてこれを全体的価値形態から一般的価値形態に転換させることなしには、不可能である。

(6)この後の方の形態、即ち、形態IIIが最後に商品世界に、一般的な社会的な相対価値形態を与えるのであるが、それはただ、一つの例外だけを除いて、商品世界に属する全商品が一般的等価形態から排除されているからであり、またその限りでのことである。従って、一商品、「リンネル」が他の全ての商品との直接的交換可能性の形態または直接的に社会的な形態にあるのは、他の全ての商品がこの形態をとっていないからであり、またその限りでのことなのである。

(7)反対に、一般的等価物の役を演ずる商品は、商品世界の統一的な、従ってまた、一般的な相対的価値形態からは排除されている。もし、「リンネル」が、即ち、一般的等価形態にある何らかの商品が、同時に一般的相対的価値形態にも参加するとすれば、その商品は自分自身のために等価物として役だたなければならぬであろう。その場合には、20エレの「リンネル」 = 20エレの「リンネル」となり、同語反復になるであろう。一般的等価物の相対的価値を表現するためには、我々は、形態IIIを逆にしなければならないのである。一般的等価物は、他の諸商品と共通な相対的価値形態を持たないのであって、その価値は、他のすべての商品体の無限の列で相対的に表現されるのである。こうして、いまでは、展開された相対的価値形態即ち、形態IIが、等価物商品の独自な相対的価値形態として現れるのである。

3. 一般的価値形態から貨幣形態への移行(p93)

(1)一般的等価形態は、価値一般のひとつの形態である。だから、それはどの商品にでも付着することができる。他方、ある商品が一般的等価形態（形態III）にあるのは、ただ、それが他の全ての商品によって等価物として排除されるからであり、また排除される限りでのことである。

そして、この排除が最終的に一つの独自な商品種類に限定された瞬間から、はじめて商品世界の統一的な相対的価値形態は、客観的な固定性と一般的な社会的妥当性とをかちえたのである。

(2)そこで、その現物形態に等価形態が社会的に合生する特殊な商品種類は、貨幣商品になる。言い換えれば、貨幣として機能する。商品世界のなかで一般的等価物の役割を演ずるということが、その商品の独自な社会的機能となり、従ってまた、その商品の社会的独占となる。このような特権的な地位を、形態IIでは「リンネル」の特殊な等価物の役を演じ、形態IIIでは自分たちの相対的価値を共通に「リンネル」で表現しているいろいろな商品のなかで、ある一定の商品が歴史的にかちとつた。なわち、金である。そこで、形態IIIのなかで商品「リンネル」を商品金に取り変えれば、次のような形態が得られる。(p94)